

CASE 3

生徒・教員がコミュニケーションのあり方を再認識し、安心して学べる環境をつくる

天草高校倉岳校（熊本・県立）



学びのUD推進委員会委員の福田英昭先生（右）、同・川上朝陽先生（左）。

「学びのUD化」で多様な生徒の学びを支える

天草高校の分校である倉岳校。少人数の学習環境を活かし、生徒一人ひとりに応じた指導・支援を行っている。同校は熊本県教育委員会より「高等学校における『学びのユニバーサルデザイン』構築事業」のモデル校指定を受け、2019年8月から2021年3月まで、「学びのユニバーサルデザイン（以下、UD）化」に取り組んだ。

学びのUD化とは、すべての生徒が安心して学べる学習環境を整備する取組のこと。「授業づくり」「環境づくり」「人間関係づくり」の3つの観点から、安心して人間関係や環境のなかでわかりやすい授業が行われる、という学びのあり方を目指す。その根底にあるのが、生徒同士や生徒と教員とのコミュニケーション環境の再構築。生徒のみならず、教員のコミュニケーションの変容を促すことを意図しているのが特徴だ。取組の背景について、学びのUD推進委員会委員で教務主任の福田英昭先生は、次のように話す。

「本校には、特別な教育的支援や配慮が必要な生徒や中学時代に学校に通えなかった生徒など、学力差も含めて多様な生徒がいます。そうしたなか、人と関係性を構築するのが難しい、教員の指示が伝わりにくい、ペアワークが成立しない、その結果として学力が定着しない……といったケースが一部で見受けられ、課題になっていました。特別な支援の必要の有無に限らず、すべての生徒が安心して学べる環境を整え、主体的・対話的で深い学びを実現するためにも、伝える・伝わるをなんとかしたいという思いから、学びのUD化の取組が始まりました」

学びのUD化の指針となる生徒編・教員編「マナスタ」

同校では、学びのUD推進委員会を中心に検討を重ね、倉岳校版学びのスタンダード「マナスタ」を生徒編・教員編の2種類作成した。授業づくり・環境づくり・人間関係づくりの枠組で、生徒編は19項目、教師編は28項目からなり、チェックリストもついている（図）。内容を部分的に更新しつつ、現在も全生徒・教員に配付しており、年2回、振り返りの機

会を設けている。

「マナスタでは、生徒、教員、それぞれに意識してほしいことを挙げています。当たり前に見えることや基礎・基本も含めて言語化したもので、一つひとつは難しいことではありません。でも、私自身もそうですが、日々の学校生活のなかでは、つい忘れてしまふこともあります。折に触れて項目を目にすることで改めて大事なことを認識し、実践するようになると思っています。その点で、マナスタの存在は大きいと感じています」

マナスタに基づき、授業や環境については、具体的なアクションとしてUD化が進んでいる。例えば、授業の冒頭でその回の目標や流れ・時間配分を提示する、振り返りの時間を設ける、指示は一度に一つだけ出す（複数出すと混乱してしまう生徒がいるため）、プリントなどにはUDフォントを使用する、掃除などの作業手順を明示する……といったことだ。福田先生自身も、生徒の目線に立つて、授業の進め方を意識するようになったと言う。

「以前は目標や流れを提示せず、時間配分も適宜という感じでした。授業のや

り方を変えたことで、生徒からも何をどこまでやるかが明確になってわかりやすくなったと言われましたし、私自身タイムマネジメントの意識が生まれました。生徒への指示出しについても、どうしたら伝わるかを意識するようになり、同様の声は教員からも多く寄せられています」

ワークショップを通して、自分ならどうするかを考える

人間関係づくりについては、年2回、全校生徒を集めてワークショップを開催している。例えば、今年度の前期は「自己表現のしかたを理解しよう」と題して、相手も自分も尊重しながら自分の意見や要望を伝えるアサーティブ・コミュニケーションを扱った。具体例を通してアサーティブな表現を学び、あるシチュエーションにおいて「こんなとき自分な



人間関係づくりのワークショップの様子。ワークシートを使い、具体的なシチュエーションを想定して「自分ならどうするか」を深めていく。

生徒インタビュー



左：長尾華弥乃さん（1年生）、右：菊池美愛さん（2年生）

普段は気にせず使っていた言葉を振り返るきっかけに

全校生徒で取り組んだ人間関係づくりのワークショップでは、2・3年生と同じグループでした。こんなとき自分ならどう表現するかを考えて共有する際には、先輩たちから自分では思いつかないようないい意見が出ていてすごいなと思いました。そして、ワークを通して、普段はあまり深く考えずに言葉を発していたことに気づき、自分の発言が相手を傷つけていることもあるかもしれないと思いました。毎回、言葉を選んで話す余裕はないかもしれませんが、伝え方について考えるきっかけになって、よかったです。（長尾さん）

相手の感じ方を想像する大切さと難しさを実感

マナスタや人間関係づくりのワークショップがあることで、「ああそうだった」と改めて立ち返ることができています。やはり、深く考えずにノリで言うってしまうこともあるので…。また、人とコミュニケーションをとるときには距離感を意識しています。一人ひとり感じ方や受け止め方は違うので、相手の状態を確認しつつ、こういうタイプなんだな…と察して合わせる感じですが、でも、その「タイプ」は私の勝手な思い込みかもしれない、そこに難しさを感じています。（菊池さん）

- 「授業・環境・人間関係」の3観点で心掛けるべきことを明文化。振り返りの機会を設け、再認識する。
- 人間関係づくりのワークショップを開催し、コミュニケーションのとり方を実践を通して学ぶ。
- 教員がコミュニケーションを学び、環境づくりに取り組む。

実践のヒント

「授業・環境・人間関係」の3観点で心掛けるべきことを明文化。振り返りの機会を設け、再認識する。

図「マナスタ(教師編)」チェックリストの項目例（一部抜粋）

ダウンロード可

【授業づくり】

- 導入では生徒に本時の目標を提示している。
- 授業の流れと時間配分を黒板左側に提示し、生徒が見通しを持ちやすくするとともに集中力に配慮した授業構成を行っている。
- まとめでは本時の目標に沿って振り返りを行い、生徒自身が意識の変化を振り返ることができるようにしている。
- 板書でのチョークの色使いを明確に分け、その意味を伝えている。

【環境づくり】

- 一つの指示に対して一つの行動ができるよう指示している。
- 否定、命令、禁止の言葉ではなく、肯定的で次の行動につながる言葉かけをしている。
- 教室前面は、必要なもののみを掲示している。
- 学年や発達段階に応じて、1日や1週間の予定を見やすく掲示するようにしている。
- 予定の変更は早めに伝え、視覚的に分かりやすく示している。

【人間関係づくり】

- 積極的に声をかけている。
- 些細な行動や、やって当たり前の仕事に対しても、お礼を言ったり褒めたりしている。
- 良い反応や考えを取り上げ、全体で共有している。
- 間違いや失敗は否定せず、受け止めている。
- 意見を述べたり調べたことを発表したりした後は、称賛や賛成の気持ちを込めて拍手をするよう促している。
- ペア学習、グループ学習等、学習の形態を工夫している。
- 他者の考えを否定せず、学び合える雰囲気をつくっている。
- 一人一人が活躍したり、認められたりする場をつくっている。

※生徒編・教師編の全編がダウンロードできます。

「扱うテーマは、傾聴、自己表現、アンガーマネジメント、断り方など、その年の生徒の状況や課題に合わせて選んでいます。SNSでのコミュニケーションに課題を感じていた年には、SNSのグループトークでのやりとりを題材に、読んだ人がどう感じるか、自分ならどのように返信するかなどを話し合いました。どう伝えれば相手が嫌な気持ちにならないか、空気を悪くしないかを気にする生徒が多く、コミュニケーションのヒントになればと思っています」

また、各学年のLHRなどで実施できるよう、人間関係づくりに役立つ各種プログラムと指導案を用意している。例えば1年生では、毎年4・5月に「サ

イコロトークング」を実施。6つのトークテーマを用意し、順にサイコロを振って、出た目の数のテーマについて話をすると、という活動だ。生徒同士が仲良くなるきっかけづくりに活用している。

学びのUD化の取組により、人間関係の部分でも「相手の気持ちを考えるのが苦手な子、思ったことをすぐに口に出してしまう子など、対人関係が苦手な子が少し成長したと思う」といった声が教員から寄せられており、「生徒や教員の意識づけになつている」と福田先生。今年度は、天草高校（本校）でも学びのUD化を推進する動きがあり、11月に行われた研修では福田先生が倉岳校の取組を紹介し、教科別のグループワークでは倉岳校の教員らがファシリテーターを務めた。一方、「校内研修が十分に行えていないのが課題」と福田先生。「マナスタも作成当時に比べると趣旨や方法論の共有が徹底できていない部分もあり、改めて力を入れ、倉岳校の特色として引き継いでいきたい」と締めくくった。

学校データ

1952年創立／普通科／生徒数25人（男子9人・女子16人）。
校舎の目の前に海が広がり、マリンフェスタをはじめとした学校行事や地域交流、ボランティア活動も盛ん。